
術士の世界～アフィリエイトと世界の歌姫

佳佐野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

術士の世界〜アフィリエイトと世界の歌姫

【Nコード】

N1831V

【作者名】

佳佐野

【あらすじ】

人の想いは力になる。

僕が出会った七川舞という魔法少女は、＜マリス＞という人の悪意の結晶体と戦っていた。

魔法を覚えたい一心で彼女とマリス退治をする日々。しかし悪意は世界を瞬く間に侵食していき、やがて僕たちは悪意を世界に蔓延させ、その悪意を源とする魔法を世界に持ち込もうとする術士と呼ばれる存在と対峙するのだった。

1・魔法少女は悪意（マリス）を退治する

カタカタとキーボードが打ち鳴らされる音が狭い部屋に響く。

大量のディスプレイにサイトが映し出される。内容は学校裏サイト、自殺サイトといったもの。

そして一番多いのがネット上で大量の罵倒や暴言が繰り広げられる『炎上』。その現象がこの男の数多のディスプレイからは確認できた。

だがその数が異常だった。ところかしこのサイトがちょっとしたことで『炎上』しているのだ。あらゆる言語で紡がれる匿名での悪意の誹謗中傷。

——自動でスク립トも組んでいるがやはり生の声が一番悪意を強化しやすい。

大量に書き込まれる悪意ある文章。

悪意。それこそが力の源。

術技はどこから力を得なければ世界に表現できない。

できることは変わらない。ただどこから力を得るか、だ。

悪意はまとめられ、コピーされ次々と広まっていく。

そして総意を形成し、揺るぎないものとなる。

善意などよりはるかに速いスピードで。

——この世よ、悪意で満ち溢れる。

男のキーを打つ速度が早くなる。

——悪意こそ人の本質。隣人を疑え、常に弱点を探しあい責め続ける。

大量に悪意ある言葉が打ち込まれる。

——幸福のパイを奪い合え。さあ不幸の蜜を集め続ける働きバチども。

人の想いは力になる。

それが集まれば奇跡が起こる。

僕はマンションから飛んだ。
遺書なんて書いていない。

突然死にたくなる衝動にかられて自ら命を絶つことにした。

理由は、将来に夢も希望もなかったから。

才能のない自分は働くにしてもたいしたことできず、ただ飯くって生きていくだけの人生しか送れないだろう。

その達観が頭を支配した。

誰からも必要とされない。いてもいなくてもどうでもよい存在。
世界から色彩が失われていく。

『どうせ死ぬのなら早い方がいい』

14階マンションの屋上から飛び降りたが、10階くらいでもつと安らかに死ぬる方法をネットで検索しとけばよかったと思った。
死ぬ前に願うことは自分を軽視した人間や社会への憎悪。ついで死ぬ羽目になった憤りでいっぱいになる。

世の中の人間がみんな憎みあつて苦しんで死ぬばいいのに――
6階目くらいまで落ちて墜落する僕を誰かが抱きとめた。
そのまま二人で地面に落ち――

そして、着地成功。

「ふーー危ない危ない」

啞然としている僕の背中から女の子の声が聞こえた。

「危なかったね。でも助かってよかったよ」
声が出ない。

ぼくはシヨックで放心状態になっていた。

「どうしたの？具合悪い？」

「……あ」

やっと息ができたような感じで喉から声が出た。

「な、なんで……」

「どうしたの？」

少女が僕の顔を覗き込んでくる。

心臓がバクバクしている。

さっき飛び降りたんだから当たり前だ。

「なんで生きてるの……？」

14階のマンションから飛び降りたのだ。

無事ではすまない。

なのにこの少女は6階あたりで僕を抱きとめてそのまま着地したのだ。

人間業ではない。

「私が助けたからだよ？」

「わかってるよ……！」

あっけらかんとした少女の態度。

僕は恩人に向かって怒声を発してしまった。

「この高さから落ちて！なんで生きていられるんだ！？」

「あー、それはねー、うーん、あんまり言いたくないんだけどなあ」

少女はうーんうーんと唸りながら考え込む。

「私ね、魔法が使えるんだ」

魔法が使える？

馬鹿な。この科学万能の時代に魔法なんて……

だが現実にはこの少女は魔法じみたことをやってのけた。

「あんまり人には魔法を見せられないの。信じないでいいよ。マリスも強くなってしまうからね……」

「マリス？」

「人の悪意の結晶。それが特定の個人に一斉に襲い掛かるの。自殺する人はこれに取り付かれるのが多いの」

そういえば、僕は突然死にたくなかった。

「マリスは人の想いの産物。この世界に魔法の存在が信じられれば信じられるほど強くなってしまふ。だから――」

少女は少し目を伏せた。

「君の記憶を消させてもらうね」

「ちょ、ちよっとまってよ!!」

僕は異様に慌てた。

「そんなことできるなんてすごいじゃないか！　いったいどうやったのさ!？」

「うーん、どう説明したらいいのかなあ」

女の子が悩んでいる。

「アニメとか漫画とかでよくあるじゃん、『魔法』って奴。私が使
うのはそれなの」

魔法。

そんな非科学的なものがこの世に存在するのか。

「あー！　その顔は信じてないって顔だね！」

「いや、信じるしかないけど！　だって魔法だよ!？　そんなの僕はじ
めてみるからさ……」

「初体験はどうだった？」

「……すごかった」

それから。

しばらくその少女と一緒にいた。

いろんなことを話した。

名前は七川舞。

聞けば歌って踊れる魔法少女アイドルを目指しているという。

実際にアイドルとしても活動中らしい。

近々曲を出してデビューするらしい。

魔法の力の源はファンの数。

僕を助けたのはマリスを追っていて、そのマリスが僕に感染した
からなのだそうだ。

僕はすごいと思った。

世界に色彩が戻ってきたようだった。

「やっぱり記憶は消さないで欲しい」

別れ際に僕は言った。

「それでお願いがあるんだ」

「何？」

「僕にも教えてほしい。その魔法を！」

僕は土下座する勢いで頼み込んだ。

「えー？確かにマリス増えまくってるから人手が欲しいって言うたら欲しいけど……」

「頼むよ！僕も魔法が使えるようになりたいんだ！」

こんなに胸がときめいたのはいつ以来だろう？

何の希望もない人生だった。

ところが魔法なんてとんでもない技術を見せ付けられた。

この技術を身につけられたら僕は世界に先んじることができる。

そう――

いずれ魔法がこの世界から発見されたときに。

僕はなんてエゴイストなんだろう。

少女は魔法を広めたくないといっている。

だけど僕はこの技術をひろめるべきものだと思っている。

事業を立ち上げて金儲けもできる。世界征服だってできかねない。そんなことはこの少女と敵対しそうだからやらないけれども、自分だけの力で堂々と生きていくことが出来る。

僕は『希望』を手にいれたのだ。それは自分だけのオリジナルのコンテンツ。

「わかったよ。じゃあ一緒にがんばろ」

舞が手を差し出す。

僕はがっちりと手を結んだ。

僕は魔法使いになる。技術を得て独り立ちするんだ――

（続）

2・世界がマリスで満たされる

男の部屋は薄汚くぼろぼろだった。

だがいたるところにディスプレイがあつた。

そのうちのディスプレイの一つが異常を示した。

マリスの自動増殖システムを一機潰された。

またか、と男は舌を鳴らす。

この世界にはまだ魔法は浸透していない。

それはこの世界の文明のレベルを見れば分かる。

だが魔法を扱える存在がいる。

同業者というわけではない。同業者であるならば、術士であることを公証する『印』があるはずだから。

『印』を持たない術士なのは、術士としての欠格である『魔人』認定を受けて潜んでいるものか、たまに天然でいる魔法使いくらいだ。どちらにしろ始末しても協定違反ではない。印なき術者は人ではないのだ。法的にも生物学的にも。

それが術士。ヒトという種族から進化した選ばれし者。

よってヒトでないものを処分しても『殺人』ではない。なによりこの世界に自分たちの世界の法は及ばない。

——少し、どの程度か見てみるか。

プログラミングは術士の基礎でありすべてだ。

どういう風に術を構成し、言語を綴るか。

大規模な結界も簡単な魔術もプログラミングなのだ。

プログラミングによって術技が構成される。

術士とはプログラマーであり、それを生業とするもの。

すばやいタッチタイピングでディスプレイに文字が埋められていく。

すぐさまディスプレイに少女の姿と名前、生年月日に至るまで表示される。

——まだガキか。印はない。

男にとってマリスの発生源が潰されても害など何もない。ただ手間が少し増えるだけ。

だがマリスの発生源を潰せるほどの力を持つ術者を放っておくわけにもいかない。

——こいつが終わった後でじっくり遊んでやる。

男はある一人の人間に夢中になっていた。

——やはり実況が一番面白い

キーを打つ音が激しくなる。

——死ね、死ね、死ね

指先から感じる死の実感。ただキーをたたくだけで人を殺せる全能的な快感。

男は恍惚とした表情で夢中でキーをたたいた。まるで楽器のように。

呪いの文章は人を焼き、殺すのだ。

§

——さあ次の生贄はお前らだ。

男の目は赤く爛々としていた。この世のものと別次元の魔人の眼。キーボードが、人殺しの音楽を奏ではじめた。

§

——シネ、シネ

カタカタとキーボードが鳴る。

——悪意こそ人の総意。お前らに居場所はない。消えろ。ミスをしたな、馬鹿が。みな喜べ、お待ちかねだったろう。こっちも待っていた。

男の部屋のおびただしいディスプレイのすべてが。

一人の少女と少年を映し出していた。

——みんな一つになれ。一丸となれ、孤独に飢えた人間たちが、みんながひとつになれるのだ。この安心と幸福を孤独な人間たちに見せ付けてやれ。

この世には悪意が蔓延している。

学校でも職場でもどこにでも。

——見えるか、マリスが。

少年はマリスを目視し、消滅させることが少しはできるようになったようだ。

すべて監視されている。

ディスプレイには彼らの姿が24時間映し出され続ける。

少年たちを監視し続けて半年。

「マリスの量が多すぎる……！それにこの自動で増殖させようとする奴はなんなの……？」

退治に赴く少女は悲鳴に近い呟きをもらした。

——その苦悶の表情をよく見せる。もっと詳細に、もっと高密度にだ……！！嗚呼人間の奏でる悲鳴こそ最高の吹奏楽器——！！

男のキーボードの指が止まらない。

カタカタと、キーボードは、ただ無常に、一定に、音を鳴らし続ける。

——より高音質でなければならん……少女の悲鳴というのは……この世の何よりも美しい音色！余すところなく集音せよ……！周波の限界までその息遣いを！その歌声は……最高の鮮度で保存されねばならん……！！

消しても消してもマリスの増殖はとまらない。

あれからマリスは等比級数的に増殖していった。

異常なスピードで増殖する悪意。

明らかに誰かが人工的に増やしている。

少女たちはそれに気づいている。

だがどうすることもできない。

それがこの男にはとても愉快だった。

今まで親しくしてくれた人々はみな余所余所しくなり、無視や仲間はずれにされるようになった。

少しのミスで人格まで否定される。

——もつとよくみせる少年、その絶望を……色のない憎悪に満ちた世界を瞳に映せ。最高の彩度で記憶しておこう。

「マリスがこんなところまで……」

あれから修練を積んだのだろう。マリスを目視し、或る程度は消去できるようになった少年は——眼の前の自分たちに向けられたおびたしいマリスに絶望していた。

——見えるか少年？ 人の悪意が

「！」

少年が振り返る。

——いかんいかん、干渉してはいかん。まだ頃合ではない、まだ

……

まだ観客であらねば。

もはや少年と少女に味方は誰もいない。

現実には絶望する少年少女たち。

その構図は男の美的感覚を満たした。

——いいぞ美しい……美すぎる！互いが互いを支えあい、寄りすがり、震え、怯え、ただ恐怖が過ぎ去るのを待っている子羊たち。もつと嗜虐^{めど}てやりたくなる……！ 丁重に……丁重に扱おう。

男の指が走る。そのたびに悲痛な声が部屋にこだました。

そのたびに男の表情は恍惚となった。

（続）

3・術士との決闘

「人の悪意がこんなに多いなんて……」
少年は絶望していた。

世界中の人間が僕を敵視しているように感じられた。
今か今かと隙を伺っている。隙あらば攻め立てられる。
そしてそんな目にあっている自分たちを周りが嘲っている。
この世は、まるで地獄のような世界になっていた。
また一機、マリスの発生源を潰した。

「誰がこんなことを……」

ビルの一室にあるマリス発生装置なるものを破壊して言った。
——頃合だ。

はつきりと聴こえた謎の声。
僕たちは疲れきっていた。

そのときを狙ったかのように、その事件は起こった。
その男はいつものようにマリス退治をしている僕たちの前に突然
姿を現した。

男は自らを術士と称した。
そして僕たちに語る。

もはや我が術力の源であるマリスは世界に十分に満たされた。
世界に術技を披露し、その存在を証明できると。

さあ魔法を広めよう、と。

男が僕に語り掛ける。
「どうだ世界に先んじる気はないか。世界の誰もが君らを羨望し後
を追うだろう」

僕と舞は自らを術士と名乗る男と対峙する。

「お前の目的はなんなんだ！なぜ魔法を広めようとする！」
僕たちは興奮していた。

悪意を自動発生させる装置を作り、人々の悪意を煽る。

なぜそんなことをするのだ、と。

「アフィリエイトだよ」

ききなれない専門用語を聞かされる。

「売ってるってわけ？何を？」

舞は知っているようだった。

「魔法がいまだ発見されていない文明に魔法をもたらす……これは双方にとって利益となるはずだ」

男は謳う様に語る。

「私はその魔法の紹介料をいただくわけだ。これはビジネスなのだ」
ウソだ。

こんな教科書に出てくる帝国主義じみた主張、誰が信じるっていうんだ。

「ふざけるな！人の悪意を煽って！」

あの大量のマリス自動発生装置を仕組んだのはこいつだ。

「いずれはこの世界も発展して術技が発見されるだろう。時間の問題だ。マリスなんぞ我々の世界にも無数にある。そんなものを恐れていては人類は進化できん！この夢の新技术は魔法は必ず鮮やかに彩るぞ。この世界を！」

「その色は赤色だろう！」

僕は叫んでいた。

確かに——僕は魔法は広まるべきだと思っている。

だが悪意を魔力の源とする魔法を紹介しようとしている。

そんな魔法が広まればどうなる？

「人の進化の源は……悪意。幾多の戦争によって文明は発達した。悪意に対抗し包容する劣った文明なぞ淘汰されてしかるべきとは思わないか？」

そうして僕たちは魔法を売る男と戦った。

だが舞と僕はあっけなく敗れた。

相手にもならなかった。

既に魔法が科学で解明され発達し、体系化されて習得されている

本物の術士には、勝てる要素などどこにもなかった。

舞が光弾を放つ。

男は何もしない。

「現代の術技は呪術で構成される。契約もすべてがだ何事か。」

男の目の前でことごとく舞の光弾はかき消された。

攻撃魔術など使えず殴り掛かった僕は――

『正当防衛』

脳裏にその言葉が浮かびあがった。

「――」

そして男から一定の間合いで自動的に吹き飛ばされた。

しりもちをつき、僕は倒れた。

「攻撃というのは究極のところ、いかに相手に効率よく効果を与えるか、だろう？」

僕は混乱に陥った。

（なんだ……？なんだ今の頭に浮かんだ言葉は……『正当防衛？』法律か？）

僕が情けなく倒れている間も戦いは続く。

舞はどこから出したのか光の刃を男に向ける。

「これなら……！」

そしてこれを晴眼に構える。

男はただ「銃刀法違反」と呟くのみ。

「うそっ……！」

一瞬で少女から光の剣が掻き消えた。

「くっ……！」

スタンガンクラスの雷撃が放たれる。

だが……。

あたりもせず舞の目前で雷撃はかき消された。

「雷撃なんぞ出している時点でエネルギーの無駄……。術技はもつと効率よく用いられなければならん！呪術こそが！攻撃術技の基本

でありその究極！」

舞に対してまるで部下に説教するような口調で男が怒鳴る。

男は苛立っているようだった。

「この……！」

今までさんざんマリスの増殖装置を作られた怒りが溜まっていたのだろう。

少女は凄まじい勢いで魔法を連発する。

まず氷の矢。

放ち終えたら雷撃の鞭。

最後に止めは、極大の火炎弾。

その全てが一斉に男に殺到する。

完全に本気の少女の魔法。

三色の魔法の刃が男に殺到する。

だが男は相変らず微動だにしない。

「最小の運用で……最大の効用……！！ 術力はな……っ！ 効率的に利用されるべきものなのだ！ その術力ならより多くの奇跡を起こせるものと悟り謙虚になれ！」

男の表情に宿った怒気が鬼気迫るものとなる。明らかに苛立っている。

凄まじい炸裂音も何もなかった。

放ったときの音しか僕は聞いていない。

渾身の力で放った彼女の攻撃は、一瞬ですべて相殺されたのだ。

まったく通じない。

舞の魔法は、通用しない。

「そんな……」

僕は啞然とした。

「話にならない……！ ストレスの溜まる術技の利用だ！」

先ほどから男の米神に血管が浮出ている。

苦もなく回避できるはずの舞の魔法に、異常なまでに憎悪に満ちた表情をこの男は見せる。

そうして男は少女を一瞥する。

舞は呪いにかかった。

声もなくあっけなく倒れた。

「ぐっ……！」

失神するように倒れた舞が苦悶の声を上げた。

「舞！」

叫ぶが僕にはどうすることもできない。

男が舞に向かって歩んでいく。

体が動かない。

男の魔法は舞のように手から火炎を放ったりとかそんなものじゃない。

意思表示。意識するだけ。

それだけで魔法が使える。

次元が違いすぎる。

これがプロとアマの差……圧倒的な差であつた。

意識するだけで相手を一撃でこん睡状態に追い込む。

こんな悪魔めいた奴とどう戦えというんだ？

僕は別に呪いにかかっていないのにまったく恐怖で動けなかった。

「やっと落ち着いたか……」

男は倒れ伏す少女と、恐怖で竦んでいる僕に語り掛けるように話し始めた。

「君たちは魔法の存在を信じている。うち一方は魔法を存分に使える存在だ。どうだ？私と契約しようではないか。みなで魔法を世界に知らしめよう。術士である我々とさらなる文明を築き上げよう」
その契約は、まさに悪魔との契約のようなおぞましい響きがあつた。

契約を迫る魔人はさらに倒れ付す舞に対して言葉を続ける。

「しないのなら、君には死んでもらう。七川舞君。わかっているように君には死の呪術をかけさせてもらった。今から呪術の内容をもう一度説明してやろう。呪術は告知により効果が発揮されるのだ。

既に意識には告知されたと思うがね」

そして男が僕にも分かるように呪術の告知をはじめめる。

効果はそのものずばり「呪いをかけた相手は必ず死ぬ」こと。

一方的に意思表示のみで殺すという——個人への攻撃を究極に分解した効果。

「世界中から集めたマリス（悪意）を君に呪術としてかけた。解除するには同じ術力で相殺するか、私と解除契約すること。残された期間は一週間だ。死ぬ前には盛大な苦悶がまつているぞ」

一週間。それまでに男のかけた呪術と同じだけの魔力を集めなければ舞は死んでしまう。男の告知に僕は戦慄した。

「君はどれだけの人に想われている？どれだけこの圧倒的な悪意より多く生きていて欲しいと望まれている？ところでアイドルを目指しているんだったな君は。こんなところで才能を潰すのは私としても気の毒だ——どうだ私と契約して専属の魔法少女にでもならないか？」

舞の目が敵意をむき出しにする。

男はそれを拒否の意思と読んだのかさらに語り続ける。

「私としてもだ。こんな呪術にせっかくの術力を扱うよりも、世界が満足する魔法を見せたいのだよ。言っちゃ悪いが時間をかけていられなくてな、長居すればするほど術力を消耗するのだ。私は術力でこの世に現界する身だからな。投資した分以上の術力を消費するとなれば現存する意味がない」

男は語り続ける。自らの弱点まで語り出すところから相当な余裕が伺えた。

「だからこそ君らとこうして直接交渉にきたのだ。君が私に賛同してくれるならこの呪術は解除しよう。そうして君らが私の紹介する魔術を使い広めるのだ。そのほうが双方にも利益だ。それはもうマジックのように世界を変——」

「さっきからふざけたこと言ってるんじゃないよ！」

少女が叫んだ。

呪術により一度昏睡され、死の呪いをかけられた舞が立ち上がる。
初めて聞く怒声。

普段穏やかな彼女からは見たこともない剣幕だった。

「ほう……思いのほか力を持っているのか、昏睡加減を間違えたか……」

「私は見たくない！マリスが満たされた世界なんて！」

呪術による昏睡から抜け出した舞が再び魔法を放つ。

雷撃。

男は避けようとしめない。

「人の悪意が人を死に追いやるのを！私はもう見たくない！！」

舞の雷撃はとても鮮やかだった。魔法は人の心を反映するものだと思う。

ならばこの男の操る魔法はどれだけ怨念にまみれたものだろう。

「その想いを無駄にするな！！」

一喝しただけでかき消される。

勝負にならない。

「うつ……」

なすすべもなく舞が立ち尽くす。

「イラつくやろうだ……」

男の態度が豹変する。

「うつ……うごか……！！」

男が呪術をまた放ったのだ。

男が少女に近づく。そして無抵抗の舞の腹部を殴った。

「ぐっ……！！」

殴られた腹部を押さえ込んで少女が膝をつく。

「一週間だ。一週間後に死ね！なんなら今すぐ殺してやってもいいんだぞ？」

先ほどまでの紳士的な口調から一転して狂人のような形相を浮かべる。

そうだ、この男は舞の魔法を見るとときいつも何か殺気を放っている。

た。

そりゃあ攻撃されてるんだから怒るのは当たり前だ。
だがこの男の憎悪は異常だ。

「あぐっ……！」

うずくまる舞に男の蹴りが埋め込まれる。

「術力が足りないんだよ俺には術力が！てめえどんだけ俺に無駄に術力使わせてんだよコラ！ 相殺するのタダじゃねえんだよ、学校でならってねえ天然ちゃんはこれだからいいよなチマチマ小言言われなくて育ってて！！ 無駄なんだよマリスが術力がっっ！！」

無抵抗な少女に男は容赦のない罵倒と攻撃を加える。

「ネットって悪意広めるのに便利だから使ってやったがまだ10数匹しか自殺に追い込んでねえ！時間かけりゃマリス集まるけどそんなチマチマ集めるのダリイし赤字になんだよ！てめえが魔法少女でデビューして一発派手に魔法を披露すりゃめでたしめでたしでお話が終わるだろうが！」

「ぐっ……え……っ」

何度も何度も舞を蹴り続ける。腹部や頭や足を滅多打ちにする。

狂人のごとき振る舞いを男は続ける。

舞を助けなきゃいけないのに、僕ときたら恐怖で足がすくんだまままだ。

「マリスを操る術技なんて俺のオリジナルじゃねえんだよ！俺みたいな才能のない術士は他人の売り物の術技を紹介するしか生きていけないんだ！誰でもできんだよこんなもん誰でも……！！俺だけの術技があればそれで稼いで今すぐでも世界中の人間を殺してまわりてえんだ！！契約だ、さっさと俺と契約しろ、契約取って稼がなきゃ俺は食っていけネえんだ！人救ってんだっただっけかあ？人を救おうとするなら儲けさせて俺から救えやボケが！」

「がっ……！！」

舞が血を吐いた。

——このままじゃ舞が死ぬ！

ようやく体が動いた。男に向かつて駆け出す。

男は少女の胸倉を掴み上げてなおもわめき散らす。

「裁判の証拠がいらなくなるんだよ。こんな便利な社会があるかなあ？お前らガキにはわかんねえだろうが大人の世界は訴訟があつてな、いついつても傍聴できるくらい争いあつてな、裁判なつたら証拠があるんだよ。そのとき契約という呪術があれば印だけで裁判所は契約関係を認める！つーか裁判所すらいらねえ！呪術だから強制できる！そうしたら紛争はすぐ解決するんだ！チャチな炎なんて御伽の魔法はいらねえんだよ、経済や法律の世界にこそ術技は必要なんだ。世界中の民事や決済を一瞬で解決する便利な存在なんだ！争いが減るんだよ！世界が求めてねえもんばつかポンポン手のひらから出してんじゃねえ！」

ぼくは一直線に男に向けて駆け出す。

その中でこの男への皮肉的なキャッチフレーズが僕の頭に浮かんだ。

——悪意を操る術士は、むしろ人の悪意にあてられて狂った。

舞の体を地面にたたきつける。そして再び殴る蹴るを男は繰り返す。

「てめえのような魔女っ子気取りの天然の才能タレントのあるアイドルのクソガキに！俺のように何年も苦勞して資格とって術士になった本物の俺が負けるわけがねえんだよ！！クソが、才能ありやがつて！なんで神様はこんなガキに才能与えるんだ？俺よりはるかに術技の才能あるじゃねえか！見るだけでウゼエよこんなガキ！死ね！死ね！死ねやクソガキが！！」

「やめろ！！」

ようやく、ぼくは舞への暴行をやめない男を突き飛ばした。

初めて一撃が通ったことになる。

これは『正当防衛』だ。その法的な効果は他人を助ける際にも適用されるはずだ。

突き飛ばされた男は呆然と僕を見上げた後。

「……まあ、あと一週間の命だ」

急に落ち着き払ったように男は立ち上がる。

「それまで考えておきたまえ」

そうして。

男の姿は何事もなかったかのように消え去った。

「舞！」

僕は男に蹴られ続けてボロボロになっている舞に駆け寄った。

「しっかりしろ！」

舞はぐったりしている。意識がなかった。

体に異常に曲がっている部分は何箇所もあった。

出血もしている。

たしか近くに病院があったはず——救急車を呼ぶよりも早くつく。

僕は舞を後ろに抱いて病院へ走った。

（続）

4・術士の世界／アフィリエイトとC8

薄暗い部屋。

おびただしい量のディスプレイには何も映し出されていない。
女がぶつぶつと呟いている。

——シーエイト……シーエイト……。

それがこの女のランク。

術士にはランクがある。

A B C Dのランクは術士会の分類。

これはとても大雑把なもので、Cクラスが術士のほとんどに該当する。

Dクラスは術士になろうとする者。術士会主催の学校で術技を専攻する者が該当する。

Bクラスが世界を支配できる力を持つ術士。これくらいになると一個人が大国レベルの力を持つ。術士は必ず術士会に所属しなければならず、術士会から外れたものは『魔人』と認定されて全術士会員の抹殺対象となるが、このクラスになると多くが術士会から離れて個人として術士会と『仲良く』やっている。そういう『仲良し』の証がBクラスという認定だ。

そしてAクラスが——

マジックルーラー。世界の支配者たる術士。

女の世界では支配者などいないからAクラスは術士会の会長が代々当たっている。

実質的な名誉職のようなものだ。

そして少女を圧倒した自分が該当するのはCシーエイトクラス八級。

それが女には齒がゆかった。

才能のない自分は苦勞に苦勞を重ねて術士となった。

どれほど人の悪意を浴びせられたか。

女の脳裏に「ヒト」であったころが走馬灯のように頭を駆け巡る。

術士が支配する世界でも「ヒト」の社会は存在を許された。ただもはや「ヒト」は術士にとって家畜だった。

家畜の生存は保障された。術力の源である奴隷として。

そして術力の源を繁殖させたい術士側と「ヒト」側の折衷案として階級が設定された。

最下位に与えられた役割は、「ヒト」の悪意をただぶちまけられるだけの存在。女は繁殖用として全階級の男から狙われた。

自分もその一人だった。親の姿も知らない。物心がついたときには既に暴力と悪意により嬲り者にされていた。

拾われたかと思ったら、玩具としてさんざんに弄ばれた事もあった。

この世に味方など誰もいない、最下位なのだから。女の眼の片隅に自分の姿が差し込む。

——憎い……！映すな！

拳がディスプレイの一つを粉碎する。

無数に散った破片の一欠けらが、長髪の女の姿を映し出す。

女は己の「性」を呪っていた。女はより犯され、辱められたからだ。

あの頃抱いた術士への羨望がよみがえる。

本来、術士は容姿にこだわる。より美しいものが効率的であるという考えの下、しなやかな肢体と瑞々しく気品のある圧倒的な美貌を誇っていた。その容姿はすべて生物の原型たる『女』を基調としたもの。

——まさに女王。あのBクラスの存在の圧倒的な美は。

そして女は、性別を捨てた。

術士に性別などない。「ヒト」ではないのだから。ただより進化してゆくだけの存在。

自分は「ヒト」を捨てた。あの頃の卑しく貧しく世界中から悪意を向けられ怯える存在ではない——！

『生物は進化しつづける。進化についていけない存在は消え去るの

が摂理の要請』

聞き飽きた言葉。

女の世界は学習の機会だけがあった。

『どのような劣った位や身分のものであっても、優れた子息に学習の機会を与え学習させ成長させることは、進化の促進に有益』

ひたすら学習を続けた。社会への報復の一心で。

『学習し、進化せんとする者はどのような存在であっても歓迎する義務を術士会は負うこととする。能力の高い者を術士会は選抜する』
そして、とうとう女は術士の資格を手にいれた。

ヒトという種族すら超越する存在となった。

自分を人柱に追いやった「ヒト」の社会について復讐できる。

—— 侵害され続けたことで発生した数多の不法行為によるヒトの債務は、その共同体である社会が連帯して償うべきもの。還元しない社会など社会ではない！

だが現実はどうか？ 自分はただのCクラスのしがない術士。Cの中の細かく等級で区分される下級の術士。

階層が、ランクが、自分の全てを縛った。

術士の自分は呪った。才能のない自分を。

やがて淘汰され消え行く自分の運命を。

オリジナルの術技を生み出すだけの才能もない。ただ他人の術技を紹介する日々。

術士の世界は徹底的な能力主義だ。

自分の扱う商品—— 悪意を術力の源とする術技を開発した術士は自分の世界ではBクラス術士となっている。

芸術的なまでの術技の素晴らしさと効率性で瞬く間にマリスを操る術技の頂点となった。

そして今までマリスを操っていた術士の術技は一瞬で淘汰され、その術士はCクラスに転落した。

そんな下克上が一夜にでも起こる群雄割拠の世界。

オリジナルの術技を練ることができればそれを売ることができる。

ヒットして自分の術技が利用されればそれで生きていける。

自分の考案した術技が翻案されれば二次使用料まで発生する。

要はこの世界で言う著作権なのだ。術士とは作家家なのである。

だが自分の術技は売れない。そもそも基本的な術技しかできない。憎い。才能のない自分が憎い。

それ以上に迫害を加え続けた世界が憎い。

術士である自分はマリスを操る術技を他の世界に持ち込み紹介料を貰う生き方を選んだ。

——生活かかってんだ……っ！こっちは……！

女は考える。

どれだけこの世界に労力をつぎ込んだかを。

術技が使えるようになるまでマリスを世界に満たすのには相応の時間の時間を要する。その間はひたすらただ働きた。

そして時期がきたらマリスによって世界に魔法を証明し、その存在を知らしめる。

それによって自分の紹介した術技を原点とした魔法の文明が花開けば、その分だけ成功報酬の蜜は多くなる。

だが過去に何度もマリスを育て紹介しても未だに小遣い程度の利益しか得ていない。

そんなシビアナアフィリエイトというシステムにでも悪い感想はもっていない。むしろ術士は感謝していた。

このシステムはローリスクで富を得られる仕組みなのだから。

やればやるだけ成果が上がる。

それに紹介された側は術技という文明の利器を得る。

買主は欲しい商品を手に入れ、売主は利益を得て紹介者も利益を得る。

『当たりの』文明を築き上げることが出来れば、術士として悠々自適の毎日が待っている。

誰も損をしない取引関係。

——そうだ自分は悪いことはしていない。むしろ正義だ。悪は人

類の進化を阻害するあいつらだ。

違法や違反などの悪はこの世でもっとも弱いもの。退治される対象でしかない。

正義と悪は一方的な力関係が支配する。

常に『正義』でなければならぬのだ。

術士会主催の学校で何度も聞かされたフレーズ。

『生命は進化し続ける。我々術士は「ヒト」を飼う生態系の頂点。術技を用いることができないヒトの劣等は明らかである。進化できぬ劣った遺伝子は淘汰されるのが必然であり当然。だから進化できぬヒトを進化した我々術士が管理し、保全すべきなのだ』

『進化を否定する者は淘汰されるべき』。それが術士の鉄則。

だからこそ才能溢れるも術技を社会に広めない少女に全てのマリヌを注ぎ込んで呪いをかけた。

それはこの女の才能溢れる者への恐れの表れでもあった。

だが女は術士たちの理屈を持ち出して自己の行為を正当化した。

——正義は自分にあるのだ！何ゆえにあのような理不尽な仕打ちを受けねばならない！？あのような悪意ある行為ばかり受けている！自分の歴史は！

術士の価値観においては、まったくもって正解の行為を自分が行っている。

だから——

——あの時自分が突き飛ばされたことは違反では断じてない！！女に広がっていく安心感。

点灯していくディスプレイ。そこに反映される姿はすでに女性ではなかった。

再開される悪意を増殖する営み。

そうだ自分は正しいのだ。

『正義』は強いのだ。そして貫くべき。

正しいものが堂々と正しい行いをして何が悪い——
男が次に考えるのはその安心を脅かす少女の処遇。

——奴を生かすことは、この世界の収益化の最大の障壁となる。
彼女はこれから成長する。術者として。

少なくとも傍らの見込みのなさそうな少年よりはるかに感じられる才気。

人の想いが力になることを発見し、それを行使する感度と行動力。魔法の発展していない世界であればどのレベルの魔法を練ってみせる才能。

あれこそ天才——

忌々しい同業者を男は呪った。

しかもその成長する魔法使いはマリスを消そうとしている。
消す効率がどんどん上がっていったら収益が確実に落ちる。

今のうちに対処すべき存在なのは明らかだった。

だが……。

男にとって、あの呪いはできれば発動して欲しくはないものだった。

発動するか相殺されるかして全術力を消耗すれば確実に赤字だ。

また一からマリスを集めなおさなければならぬ。その分だけこの世界への投資が増える。

——そうなれば撤退するほかない。これ以上は自分の術力がもたない。

相殺はまず無理だろう。世界中のマリスを集めたのだから。

——まあいい。これも必要な投資だ。

彼女さえ消えてくれればもはや邪魔者はこの世界にはいなくなる。

あとは簡単にこの世界を収益化できるだろう。この文明に魔法をもたらすことに成功すれば、少なくとも投資分は確実に回収できる。

死に際にでも解除契約は成立する。少女が心の中で合意するだけで契約は成立する。

なんなら相殺に応じてもいいのだ。術技の量はいくらでもいつでも任意に減らすことが出来る。それは全ての術力を失わないという保険でもある。なに、契約さえ取れば有害でなくなった少女はむ

しろこちらの味方。すぐに元以上回収できよう。

——死ぬ3分前には半分くらいにしてやるかな。なんなら俺がプロデュースしてやる、お前を！魔法少女として世界に……！

男が舌なめずりする。

それが合意。この世界の法的にはどうだか知らないが、「ヒト」でないものに人の作った法なんぞ関係ない。

——なによりも「印」なき術者など我らの世界では無価値であり法的に無主物！処分の権利は先占者の独占！

自分もあの魔法を操る少女も、もはや「ヒト」ではないのだ。

それに傍らの少年が必ず彼女を生かそうと説得する。これは何よりも有効だろう。

男は勝利を確信していた。この案件は、取れると。

一通り思考し、憂いから解放された男は膨大に並んだディスプレイに向かう。

——さあ仕事だ仕事だ。俺は術士という名の自由業者だ。負ければ現世で術力集めの奴隷生活。パートタイム勝てば先生様の士業でございます。

キーを打つ音が快活さを帯びる。

この世界にあるインターネットとやらは、既に現代の魔法ではないか、と男は感想する。

電子の世界ではその気になれば誰でも指先だけで炎と呪術が繰り出せる。これを魔法と呼ばず何と呼ぶ。

今日も男は電子の世界で炎を放つ。

誰でも簡単に人を追い込める。

——ほら燃えた

人を殺す呪いの言葉を紡ぎ出す。

たった2、3の文字だけで人が動く。人が殺せる。

——ほら死んだ

(続)

5・世界の歌姫は祝詞を歌う

全治二ヶ月の全身打撲。多数の内出血と骨折による個室での入院。舞の医学的な診断と処置は命には別状がない『重傷』という程度だった。

だが呪術的には一週間後に死が迫っている。

魔法を他人の文明に紹介し、利益を得る。アフィリエイトと呼ぶ事業を行っているあの男がかけた呪い。

「人の進化の源は……悪意。幾多の戦争によって文明は発達した。悪意に対抗し包容できん劣った文明なぞ淘汰されてしかるべきとは思わないか？」

あの男の言った言葉。

僕はその言葉から推測する。

恐らくはあの男たち術士は多くの文明に魔法をもたらした。

産業革命、IT革命に次ぐ第三の技術革命。

魔法という技術は、確実に世界の構図を変える。

その結果、多くの世界で争いが起こった。革命的な技術によって争いが勃発した。

それによって多くの命が失われることになる。

あの男の紹介した魔法は悪意を媒介とするものだからなおさらだ。むしろだからこそ文明が滅びていくのかもしれない。

それは恐らくあの男の世界でも起こった歴史。もしくはあの男が魔法をもたらした他の文明で起こったこと。

たぶん実際に滅びた世界もあるに違いない。

実際にあの男はこう言っているのだ。それに耐えうる社会のみ生き残るべきだ、と。

僕たちは選択を迫られている。

魔法を世界に導入することを認めるか、そのまま舞が死ぬのを指をくわえて眺めているか。

こんなものは僕たちだけで選んでいい問題じゃない。

それこそ人類全員で投票して決めるべき問題だ。

でも僕は舞を助けたかった。

契約の代理人になれるなら僕は今すぐでも契約したい。

あの魔人というか狂人と契約して魔法を広める約束をすれば僕は彼女を助けられる。

でも彼女は契約しようとしないう。

『人の悪意が人を死にまで追いやるのを！私はもう見たくない！！』

あのととき感じられた強い決意。気迫。

舞の過去に何があつたのかは知らない。

僕は共感しないから。そんな自分を滅ぼしてまで人を助けようとする精神には絶対に共感したくない。

悪意を恐れていて何になる。僕たちは悪意と戦ってきたじゃないか。

恐らくはあの男の考えた言葉ではないだろう、先ほどの口上に僕はある程度は同意する。

あの男と契約するのは敗北かもしれない。

だけど僕たちは進んでいくしかない。

人は踏み出すべきだ。

悪意とはつき合っていかなければならないのだ。

彼女が目覚めるまで僕はずっとそばにいた。

一晩たつて彼女は意識を取り戻して目覚めた。

「私ね……」

「しゃべっちゃダメだ舞！」

怪我によつて舞の声はどこどころ揺れている。

だがそれでもかまわず病室にいる舞が傍らにいる僕に呟いた。

「世界中のマリスが集まつて……それが私を殺す呪術となるのなら

……私はそのために死んでもいい」

「馬鹿！」

全身の怪我で声が途切れ途切れの人間に声を浴びせる。

でも僕の呵責は止まらない。

「命あつてのものじゃないか！それに舞が死んだつてどうせ魔法はいつかこの世界にもたらされる日があるんだ！あいつじゃなくてもあいつ以外の誰かが必ず！」

もう僕は抑えられない。

「マリスなんてこの世にいくらあると思つてゐるんだ！人は善意も悪意もあつてこそ人なんだよ！そんな命を捨ててまでやることじゃない！」

僕はいつの日か魔法が世界に発見されると思つていた。

あの男に世界に先んじる気はないか、と聞かれた時、僕は動揺を隠せなかった。

ゾツとしたといったほうが正しかった。

僕は舞と出会ったときにまったく同じ事を考えたから。

魔法をビジネスにしようとしていた。

あの男の言つたように、みなが自分の後を追うと思つたから。

今までさんざん馬鹿にしていた連中が必死で僕の後を追う――

その光景はなんとすがすがしいだろう。そんな白昼夢を思い描いてしまった。

全部あの男が言つたとおりのことを考えていたのだ。

僕は――あの男と似ている。

今でもそうだ。

僕がもし魔法を使えても世界の平和のためには戦わない。

魔法を使えるなら私利私欲のままそれこそあの男のように――世界を侵略していただろう。

「人の悪意が人を死にまで追いやるのを！私はもう見たくない！！」
彼女の怒声。

僕はマリスによつて死のうとしたとき、僕は僕を軽視した世界中の人間を呪つた。

「世の中の人間がみんな憎みあつて苦しんで死ねばいい」
それは悪意だ。マリスを増殖させる行いだ。

もし僕がああ男の世界で生まれていたら――

ひょっとしたらその相手は僕だったかもしれないのだ。

「私ね……」

弱弱しい声で舞は話し始めた。

「魔法は……もたらされるものじゃ……ないと思うの」

舞の瞳が僕を放さない。

「悪意が……あるのは……わかってる。でも……魔法は……まだ、ない」

少女の声は弱弱しい、しかし瞳に宿った意思は強く。

「魔法は……広めるものじゃない……広まるもの……」

§

「ファンレターって……嬉しいねっ」

少女の声が弾む。

でも僕は憂鬱だった。

彼女は弱小のアイドルだけ一応アイドルだからファンレターや花束が届く。

だけどどうにもならない。その程度の善意ではああ男の集めた圧倒的な悪意には勝てない。

時間がどんどん過ぎていった。

僕たちには何も出来ない。

ああ男は強すぎる。居場所をつきとめて殴りに行っても返り討ちに遭うのがオチだ。

彼女はといえばこの一週間、歌詞をずっと考えていた。自分のデビュー曲のだ。

『私ね、CDデビューするの』

そういえば初めて会ったときそんなこと言ってたか。

彼女はこんな状況でも創作活動に専念している。

僕は舞の創作活動の補佐に当たった。

浮かんだフレーズをメモして、書き残す。

ペンが持てない彼女のために。

そうでもしなければやってられない状況だった。

僕では舞を助けられない。

そして……

とうとう呪いが成就する日がやってきた。

「今日で……」

「うん……」

僕は力なく呟いた。

時計の音だけが病室に響く。

「ぐっ……！」

急に痛み出したのか彼女が苦悶の声を上げる。

呪術の効果が強まっているのだ。

一週間後の今日という日に人を呪い殺すという呪術。あの男がも

たらした世界からの悪意。

その全てが舞に殺到している。

「舞！」

「平気……」

そう言っ僕へと向けた表情は。

とても穏やかなものだった。

舞は受け入れる気なのだ。

世界中の悪意全てを。

けれど。

彼女が死に、一度リセットされた後どうなる？

またあの男が集めただけじゃないか……。

結局は舞が死ぬだけで終わる。

僕はやりきれない気持ちになった。

彼女は気丈に振舞っている。

だが自分はなんと無力なのか、と。

「舞、やっぱり——」

僕がああクソつたれと契約しようと言いつけた時だ。

「ねえ……」

弱弱しい声で僕に話しかけてくる。

話したいことがある様子だった。

僕は彼女のそばによった。

すると突然、僕の唇が暖かい感触を感じた。

「えっ……」

呆然とする僕に、

「いままでありがとう……」

突然のことに僕は戸惑う。

僕は少女のことは好きといえば好きだけど、恋愛感情というより仲間として見ていた。

周囲からの悪意に晒され続けていたときも耐えられたのは同じ境遇の彼女がいたからこそ。

——将来、魔法が発見されたときのために彼女から魔法を学んでおこう。

完全な野心で僕は舞に近づいていたのだから。

ああ、これってAだよな、とかぼく初めてだ……と思った時。

「私の歌……聴いてくれる……？」

傍らにいる僕に少女が問いかける。

その表情は少し不安げだった。

断るわけがなかった。

「二人で作った曲じゃないか。当たり前だよ」

歌詞は昨日にようやく完成した。

アイドル魔法少女七川舞のデビューとなる曲の歌詞が。

「ありがとう……っ」

少女の表情が一気に華やいだものになる。

ああ、なんて素敵に笑顔なんだろう。

僕は少女の手を握った。

「じゃあ……はじめる……ねっ」

少女への呪術の戒めが強まっていく。

もはや声すら口クに出せない症状だというのに。

それでも彼女は歌う。

あの男はこの状況を嬉々として眺めていることだろう。

それとも茶番とでも思っているのか。

でもかまうものか。

死ぬ一瞬まで絶対に離れない。

最期の声まで聞き逃さない。

全身怪我だらけで声を出すのが苦しい舞が歌を口ずさみ始める。

呪術により彼女の体は蝕まれている。

その歌声はどこどころ途切れていた。

呪術の効果がいよいよ極相を迎える。

少女に課せられた負荷はいかほどのものか。

舞の表情が苦痛に歪む。

それを見るとさっきの決意なんて一気に吹っ飛ぶ。

やっぱり契約しよう——そう言い掛けた。

だが、彼女の声はだんだんとはっきりし始めていた。

表情も凛と本物の歌姫のようになっていた。

「舞……？」

一瞬、治ったんじゃないかと思うような清楚な声。表情。

メイクアップされたように可憐な姿は余命幾ばくもない者の姿で

はない。

理解する。彼女は変身したのだ。

病室に彼女の音色が響き渡った。

とてもキレイで、一点の淀みのない声。

僕は聞き入ってしまった。

いつの間にか僕も彼女と同じように歌いだしている。

同じフレーズを口ずさみ、リズムを合わせる。

世界を祝福するとても素敵で魔法の歌詞。

彼女とともにその祝詞を読み上げる。

ここにきて僕は魔法の真髄を理解した。
音とは原子の振動。

一個の原子が振動すれば、その振動はどんどん広がっていく。
それは部屋を超えて海を越えて、宇宙の果てまで影響を及ぼす。
その振動が法則を持ち感知した人を感動させるのが音楽ならば――
一瞬だけでいい、
一瞬だけ――

世界よ、共鳴しろ！

薄汚い男の部屋。

おびただしいまでの量のディスプレイが並んでいる。
カタカタと音が鳴り響く。

その音は世界で唯一の異質な音だった。

その音が、一瞬だけ止まった。

再びキーをたたく音が再開される。

ディスプレイから映像が一つずつ消えていく。

震え汗ばんだ手はどんどんキーをタイプしていく。

だが音は何とも共感しない。もともとこの世界のものではないのだから。

音はどんどん小さくなっていき――

ダン！

キーボードに男の鉄槌がめり込む。

それっきりだった。

やがてその部屋には何もなくなった。

（続）

6・その後の世界／人の想いは力になる／

あれから、ようやく舞は退院できるようになった。

病院から出るや否や「やっと病人生活から抜け出せる／！」と元気に自分に治癒の魔法をかけていた。

投げ捨てられる松葉杖とガーゼ。すぐに炎の魔法で完全燃焼かつ証拠隠滅。

最初からそうすれば？ ああ献身的な僕の介護は何？ とか言っ
てはいけない。

医者が魔法を信じてしまう。というか商売上がったのだ。

彼女は世を忍ぶ魔法少女なのだ。世を混乱させてはならない。

複雑骨折ならば複雑骨折のままで耐え忍ぶのが魔法少女なのだ。
ステージにたつ

「ジャーン！」

舞が口を大きくして歯並びを僕に見せる。

折られたりした歯は、全部新品同然に生え揃っていた。

「歯はアイドルの命だもんね！」

光沢のある歯から「キラッ」という効果音が聞こえてきそうな
スマイルを決める。

——歯科医もだめだな。

あれから。

あの男は姿を見せない。マリスの自動発生装置もでてこなくなっ
た。

どうやらこの世界を収益化することを諦めたらしい。

今頃は他の世界に乗り込んでイチから悪意集めの営業活動に精を
出しているのか。

あの男といえは。

僕は思い出す。

あの男との一件の後で変わったことがある。

魔法の産物が科学的に初めて発見されたのだ。

内容は人の悪意^{マリス}の結晶と、善意^{イデア}の結晶らしきものを観測したというもの。

あの日、舞が世界中の悪意を相殺するほどの力を持った影響かどうかは分らない。

だけどそれはこの世界の人間が自力で科学的に見つけたものだ。それらの結晶が世界にどういう影響を与えているのかも科学的に現在も不明のまま。

あの男の世界のようにみんなが魔法を使えるとは程遠い。

だが、この革命的な発見がこの先どうなっていくかは分らない。僕たちの世界は良くなっていくのか、悪くなっていくのか――。

病室の彼女にそのことを報告すると素直に喜んでいた。

意外だった。

あれだけ魔法が広まることを恐れていたのにだ。

「この世界の人間がちゃんと自分たちの技術で見つけたものだからいいの」

舞やあの男が魔法を広めるような人為ではなく自然に魔法が見つかっていく。

彼女はそれを望んでいたのだ。

「それに、これでやっとアイドル魔法少女としてマリス退治ができるしね！」

彼女の表情が晴れやかになる。

僕は内心複雑だった。

アイドルになったら恋愛禁止だし、それに初めてのあのAは――絶対に『契約』させられる。他言禁止の。

ところで彼女のCDの発売日が決まった。

CDでは伝えられないかもしれない。彼女のあの声は。本人にももう出せないかもと言っていた。

けれど、僕はきつと彼女は成功すると信じている。

なにせ一瞬でも世界を共感させた彼女のデビュー曲だ。きつと耳に残る。心に響く。

僕は祈る。

この世界において——人の想いは力になる。

ならばどうか、この想いが結晶となって、少しでも彼女を支えま
すようにと。

（終）

6 ・その後の世界／人の想いは力になる／（後書き）

おそらくは一人いるかいなかだろう全話を読破された剛の者。
最後まで読んでいただいた方、それだけで感激でございます。
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1831v/>

術士の世界～アフィリエイトと世界の歌姫

2011年8月6日03時31分発行